



Title	MurryのMansfield論
Author(s)	甲元, 健雄
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 36-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98930
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Murry の Mansfield 論

甲 元 健 雄

J. M. Murry (1889—1957) の Mansfield 論が Gissing 論, Williamson 論とともに一冊にまとめられ, T. S. Eliot の序文をつけて 1959 年出版されたが, この論集の編者で Murry の最後の妻となった Mary もいっているように, ⁽¹⁾これがかれの唯一の Mansfield 論である。この論考の中心をなすいくつかの問題点の原型は, かれが編集した Mansfield の「日記抄」や「書簡集」の序文などに散見するが, Mansfield の心的発展を作品その他から引用しながらの女の信念とその意義を解明し, それを通してみづからの文学観をも提示している点で, Mansfield のみならず Murry を研究するものにとっても貴重な文献である。

この論考の型も例によって, Murry 独特の弁証法的正反の綜合なのであるが, かれが理論を展開する場合のいくつかの用語が, Murry の批評の性格を理解するのに重要であるとおもわれるので, それを手がかりとし他の二・三の文献を参考にして, かれの Mansfield 論の解明を試みることにする。

Murry は Mansfield を, なににもまして「誠実」honesty を重視した作家であり, 「真実」truth を求めてひたむきな精進をつづけたというが, 誠実であろうとするには, ありのままの人間でなければならないし, 作家がありのままの人間であるためには, 「自発性」spontaneity を十分にそなえていなければならない。自発性は「小鳥が歌うように作家がなんの努力も払わないで書きつづける」というような意味に誤解されてはならないのであって, ⁽²⁾そのような

(1) *Katherine Mansfield and Other Literary Studies* (Constable, 1959) 以下 K.M. と略す。

(2) *ibid.* p.72.

間違った意味での自発性は、いわゆる「職業作家」 professional writer に適用すべきものである。真の自発性は「書く自我」 writing self と「生きる自我」 living self に分裂がなくなっではじめて獲得できるものであり、これには異常な努力を必要とし、自分の経験にあくまで忠実でなければならない。誠実とは一見内包の把握しやすい常識的な言葉のようであるが、Murry のいう「誠実」には実に深い含蓄があって、Mansfield 論では冒頭に現れてくる用語ではあるが、逆に結論的な用語の一つとみてもよいと考えるので、その意義については後で再び触れることにする。以上の Murry の考えを裏書きするような言葉が、「マンスフィールド短篇集」に付けられた E. Bowen の序文にもみられ、その二、三を拾ってみると、「かの女は構成 (construction) よりかはるかに知覚 (perception) を重んじた」、「外面的な絵図がまずかの女の脳裡に浮んだ」、「かの女の知性も素晴しかったが、かの女が頼みとしたものは、直覚的認識 (intuitive knowing) つまり透察 (vision) であった」⁽³⁾ などである。この意味から Murry は、かれが Shakespeare や Keats にしばしば適用し、偉大な作家になくて叶わぬ内質と考えている「経験性」 experiencing nature にかの女が生まれながらに恵まれていて、「かの女は物語りの話し手ではなかった。かの女は本質的に、非凡なまでに有機的な感性を媒介として、自らの生の経験に感応した人であった」⁽⁴⁾ と述べている。

生の経験へのかの女の切実な熱望の滲みでた作品として、Murry が興味を覚えたものが *The Woman at the Store* であったが、この短篇をかれが編集していた雑誌 *Rhythm* に掲げたことが機縁となって二人の間に恋が芽生え、急速に発展して同棲することとなるが、この間の事情は、かれの自伝や、かれが作家の志を抱いてオックスフォードを去りロンドンへでてきたときの「想い

(3) 34 *Short Stories: Katherine Mansfield* (Collins, 1921) Introduction, p.3.

(4) K. M. p.73.

出の記」に詳しく述べられている。Murry との恋、かれを通してかの女が見だした「愛」はかの女に大きな影響を与え、かの女はそれまでの苦悩と幻滅の経験とこの愛との調整に苦しんだと Murry はいう。苦悩と幻滅とは、かの女がロンドンの Queen's College を卒業して1906年故国 New Zealand に帰り、その粗野偏狭な国振りに耐えかねて1908年再びイギリスに戻ってから、腹膜炎を患い、声楽教師との結婚は一日で失敗、その後バヴァリアの修道院に入ったり孕んだ子供が流産したり、さらに修道院をでてバヴァリアの鉱泉で保養生活をつづけた放浪時代の苦悩と幻滅であって、この間かの女は徹頭徹尾皮肉な小品を試作したが、これらのスケッチは *In a German Pension* に収められている。

生の惨酷、つまりかの女の言葉をかりていえば、「葉の裏のかたつむり | the snail under the leaf と幻滅とを嫌というほど味ったかの女、Murry との恋を通じて経験した「愛の理想主義」とこの苦悩との矛盾、ついで Murry との愛に浸りきるかにおもえた Mansfield も、呪わしい過去の思い出や厄介な事情——Murry は明言していないが、もちろんかの女の先夫との離婚判決の効力が6年間も生じなかったことに言及しているもの⁽⁵⁾と考える——、迫ってくる一次大戦の登音、さらに夫としての Murry の性格などのためにかの女の愛も次第に幻滅に陥っていく。Murry の性格とそれに対するかの女の心的態度を示唆するものとして、かれはつぎの Mansfield の日記の一節を引用している。

「永い間かの女は、かれの性格のどの面も変えたくないと本気でいっていた。それでいてかの女は、かれの性格のいろんな点が気にいらず、別なもので

(5) *cp. Between Two Worlds* (Jonathan Cape, 1935) P. 184 ff. J. Lehman (edit.): *Coming to London* (Phoenix House, 1957) p. 100 ff.

(6) *cp. F. A. Lea: The Life of J. M. Murry* (Methuen, 1959) p. 31 ff. J. M. Murry: *Between Two Worlds*, p. 478 ff.

あってくれたらとおもうのであった。とすぐまた、かれの性格のどの面も変えたくないといい——しかも本気でそういうのであった。ついでかの女の嫌いかれの陰暗な面に無関心でいられるようになり、その性格のどの面もそのままであってほしいと本気でいうのであった。しかしいまではかれを非常に愛していて、かの女はかれの陰暗な面まで好きになってきた。そしてかの女は、陰暗な面もかれにあってほしいとおもい、もはやそれらの面に無関心ではいられなかった。それでも、それら陰暗な面はいぜん陰暗でそぐわないものではあったが、かの女はそれらの暗い面まで愛すようになっていたのである。このことこそ陰暗な面が待望していたものであり、これによって暗い面から暗さが流しおとされ、呪わしさがとりのぞかれ、これらの面は再び王女のごとく光の予らのごとく光り輝いたのである——これを普遍的な言葉で現わすと「かの女は美を発見してこれを愛し、つぎに美と不離の醜を発見してこれを憎み、さらにこの醜に無関心となり、最後に醜をもふくむ美を愛することができるようになった」というのがMurryの解釈である。つまり新しい美の発見であり、個人的な愛から新しいより大きな内包をもつ愛——普遍的な愛への愛の「品化」crystallizationを意味していると考えてよいであろう。Murryが *The Nature of Poetry* で Shakespeare の *The Phoenix and Turtle* を評して、「この詩は 知的理解⁽⁸⁾の次元をはるかにこえた高いところにかかっている」とか、この二羽の鳥の完全な愛の力に打たれた理性が面喰い、「愛に道理あって理性になし」 Love hath reason, reason none. と叫ぶ一行をとくに強調して、「理性が熟慮の末より高い力に捧げる敬意である」と断言しているのも、この愛の品化を訴えているわけである。⁽⁹⁾

普遍的な愛が発見するものは、Murry にいわせると「全真理」 total truth

(7) K. M. p.76.

(8) *Discoveries* (Jonathan Cape, 1940) p.13

(9) *ibid.* p.23.

の美であり, Keats が最後に発見した美であり, Keats をして Beauty is truth, truth beauty. と叫ばしめたものなのである。このように Mansfield の人生においても芸術においても, それ自身のうちにある矛盾を克服していく自己発展というものがあり, この発展への一段階として, 幸福から幻滅へ, 生から死への変化が考えられ, これをテーマとする作品として *The Garden Party* や *Bliss* などはい例であるとおもうが, D. Daiches はこの変化を「情況の激変」Peripeteia と呼び, だが Mansfield の手法の一つとみて余り深く掘り下げていないが, Murry ⁽¹⁰⁾ にあってはこの 'peripeteia' に重大な意義がある。なぜなら, それは「全真理」への一つの大きな踏切り台となっているからである。幸福と幻滅の相剋は, 「無垢」Innocence と「経験」Experience, また「生」と「死」との相剋でもあり, 生と死の矛盾を克服してより高次の生への発展を, Murry は *At the Bay* の祖母と孫娘とが叔父(祖母の息子)の死について語り合う場面——死すべき人間の運命をしみじみと意識している老婆が, 「おばァちゃん, めったに死なないといって頂戴」とせがむ孫の無邪気さに, 自分の死ぬ運命を忘れてしまって孫と一緒に大笑いをする場面を引用して, 「老婆は子供の純粋な無邪気を媒介として自己の経験を超絶し, 再び子供の無邪気さにかえり」……死の観念を契機として「生の意識が再び絞りだされ, 生のおだやかな本能的な流れそのものとなってしまったのである」と考える。⁽¹¹⁾

さらに Murry は, かの女の故国 New Zealand に対する Mansfield の心的態度にも, 弟 Leslie の戦死を契機として, 嫌悪から愛着へ, 軽視から再評価への変化がみられることについても, かの女の心的発展と関連して説明しているが, このことは, かれがすでに Mansfield の伝記ですでに解剖しているし, L. Gillet や S. Berkman もこれを説明しているのだから, ⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾ ⁽¹⁴⁾ ここでは触れな

(10) *New Literary Values* (Oliver and Boyd, 1936) p. 88 ff.

(11) K. M. P. 80.

(12) Mantz and Murry: *The Life of K. Mansfield* (Constable, 1933) Introduction, p. 2ff.

(13) *Esquisse Anglaise* (Firmin-Dido, 1930) p. 177ff.

(14) *K. Mansfield* (Yale Univ. Press, 1951) pp. 24-25; pp. 83-84.

いことにする。

Murryによれば、「われわれが『事実』Factを受す場合、事実は『真理』Truthとなり、われわれが自己の激情から脱却して事実を受すようになれば、『平安』Peaceを達成することができる。しかし事実が真理になるためには、事実そのものが変化するのではなく、変わるのは人間自身なのである」⁽¹⁵⁾というが、すでに引用した「日記抄」の一部や *At the Bay* の祖母と孫娘の会話の意義もここにある。さてこうした Murry のいき方を、かれの新しいロマン主義と呼んでよいが、その主義の信念は、*More about Romanticism* で明確に提示されているので、これによってかれのロマン主義に少し触れることにしたい。この論考は、当時 *The Criterion* の主筆であった T. S. Eliot の古典主義に対抗してかかれたものであるが、Murry はまず、「『知的真理』intellectual truth としてはロマン主義と古典主義は共存できるものであり、互いに黙認しあえるものであることを認めながらも、積極的な信念としては両者は鋭く対立するものであり、ことに一次大戦後の不安の時代においては、積極的な信念としてのロマン主義を採らざるをえない」⁽¹⁶⁾ことを強調して、自分の新しいロマン主義の系譜と意義を説明する。⁽¹⁷⁾

Murryによれば、ルネッサンスに始まる人間の「外部の世界」と「内部の世界」の探究は、前者の場合 Galileoによる Copernicus の説の確認、Ansonの世界一周航海、Dampierの南太平洋航海やオーストラリア沿岸探査などのために、宇宙の中心と考えられていた地球は地方的な地位に転落し、地上の住人も完全に些細な存在と化してしまって、人間はしらずしらずのうちに「必然」Necessity が君臨していくのを感じて不安を覚えるようになった。この「必然」に大笑いを禁じえなかったのが Voltaire であり、「外部の世界」の図表化に余念のなかった人が Diderot であるが、「外部の世界」に背をむけ「内

(15) *Studies in Keats* (Oxford, 1930) p. 80.

(16) *To the Unknown God* (Jonathan Cape, 1930) p. 134.

(17) *ibid.*, p. 135.

部の世界」に沈潜しながら、その世界の根本的な真理をその真理の適用をうけない「外部の世界」を踏まえて提示しようとする誤りを犯した人が Rousseau であった。Rousseau の言葉「人間は生れながらにして自由でありながら、到るところで、束縛されている」は、むしろ「人間は自由であるが、あらゆるところで『必然』の支配をうけねばならぬ」と訂正すべきであると Murry は⁽¹⁸⁾考える。つまりかれは、Rousseau のロマン主義を不完全なロマン主義と考え、「人間の存在」と「人間の知識」の根本的な矛盾に対する意識の程度の差によって、不完全なロマン主義と新し高次のロマン主義との区別が生じるとみて、不完全なロマン主義は、「必然の世界」をロマン主義が直ちに反抗ねばならぬ「脅威」、また「外部の世界」を放逐すべき「幻影の世界」としてしか意識しないのに反して、より高次のロマン主義は、人間の意識の矮少を拡大するというか、人間の意識の性質そのものにおこる一つの変化というか——Murry の言葉をかりとえば、「ロマン主義が『包括的な本体論的真理』 comprehensive ontological truth であることを要求しない」で、⁽¹⁹⁾必然と自由を相反する範疇にいれず、現実を一つの有機的な生きた全体と考え、必然も知的に理解された必然ではなく、また自由も人間が自己のうちに感じる即時的な自由ではなく、有機的な全体としての内部の世界を支配する調和の法則にしたがって、「必然」と「自由」の綜合をなしとげるべきである。このためには、なににもまして「誠実」を必要とするが、誠実とは、人間が現実を有機的な生きた全体とみなすことができるための「霊性」 Soul の獲得、つまり空しい排他的な「我」 ego を克服して、真の自我を発見するための非常な努力と謙虚な心的態度にほかならない。この誠実を達成した人は、必然と自由との相剋は結局二つの理論の相剋であって、人間は意識の拡大によって、これらのものを調和できることを知るはずである。

(18) *ibid.* p. 137 ff.

(19) *op. ibid* p. 140 ff.

最初に、Mansfield がなににもまして誠実を重視した点を Murry が強調したと述べたが、結局 Mansfield もより高次の新しいロマン主義の目標にむかってひたむきな努力を続けたということに他ならない。Murry のロマン主義は、精密科学の権利と意義を否定するものではないが、真の啓示は「知性」head と「感性」heart が創造的調和においてする協力——つまり「想像」Imagination の働き、換言すれば「霊性」によってもたらされるものである。したがってかれのロマン主義は、人間の経験のうちでもその詩的要素を重視し、その魅力は極めて審美的であり、宗教的な経験を強調するものである。⁽²⁰⁾

Murry は 1922年3月29日付のかれの弟 Richard への Mansfield の手紙の一部、「宗教についてですが、貴方のおっしゃるのは、“生の研究”でしょうか、それとも“キリストの宗教”のことでしょうか。……不思議なことは、この両者が少しも矛盾しないということです。私は生の研究に没頭し、自我を放棄してはじめて心の平安をうるのです」を引用して、これこそ Mansfield が生の経験に自らを捧げたことを物語るものであり、誠実な人間とその人間の経験の間には、概念も因襲も安易な媒介を介入させることはできず、この内質をもつ人間は、「前意識的な存在」pre-conscious being の単純性へ立ちかえり、しかもその単純性は「意識の鋭敏性」subtleties of consciousness によって豊かにされているという。⁽²¹⁾

経験性に恵まれた誠実な人は、自己を経験に曝すことを絶対に拒否しない。世俗的な意味での賢人は、他者——人間の世俗的な思慮という偉大な他者の知らせをそのままに受けいれて自らの才能を地中に埋めて、イエスとともに危険を冒すことをしない。しかし偉大「知恵」Wisdom は、いかなる犠牲を払っても計り知れぬ霊性の強い衝動の命に応じて危険を冒すものであるが、Murry

(20) *cp. God: Being an Introduction to the Science of Metabiology* (Jonathan Cape, 1929) p.124.

(21) K. M. p.91.

は Mansfield の言葉——「小舟は暗い恐ろしい深淵に入り、われわれはただ『もう一度陸に上げてください』と脱出を求める叫びをあげるのみです。しかしすべては無益、だれもこの叫びを聞いてはくれず……影のごとき舟人は漕きつづけます。人は静かに坐して、目のおいをとるべきです」を引用して、「この心象によってかの女がいわんとすることは、『死』 Death と『苦難』 Suffering の『受容』 Acceptance に他ならぬ。この死は、Bliss の Bertha Young の幸福の破滅でもあり、また *The Garden Party* の Laura の幸福の破滅でもある」と述べている。死を受容すること、それは死に「終局性」 finality を熱望することである。「*Measure for Measure* で Claudio が死の終局性の確信を強めるにしたがつて、死は生への門であるというキリスト教的な意味ではなく、死が完全な休止であるがゆえに、Claudio にとっては死がますます生への勝利となってくる。」死の終局性に徹することは、生の事実しかも最終で最大の事実である死を受容することであるが、それはまた最大の「必然」に自己を捧げることでもある。生の経験に感応するためには、「非個人的な愛」 Love が必要であり、愛もまた誠実から生まれてくるものである。「もし Mansfield が『非個人的な愛』を経験していなかったら、かの女の初期の作品の原動力となった失望の感に終始したことであろう。」人は愛によってすべてのものに美を発見することができ、Cleopatra とともに「死の一撃は愛人のつねりにもにて、痛いけれども望ましいもの」といえるのである。この境地が「真の想像の世界」 world of true Imagination⁽²⁴⁾ であり、Murry にいわせると、「霊的感觉」 Spiritual Sensation の世界——直接経験の世界であるがゆえに「感覚」の世界であり、同時に五感あるいは五感の比率にすぎぬ知性では絶対に認識しえないがゆえに「霊性」の世界でもある。以上 Murry の批評上の用語の意義を、Mansfield 論を中心とし、コンテクストからできるだけ正しく解明しようとしたが、この拙稿が Murry を研究しようとする人に少しでも役立つならば幸いである。

(22) *Discoveries* p. 29.

(23) K. M. p. 75.

(24) *Discoveries* p. 30